



男と女の織り成す大江戸絵双六 シリーズ第二回②

江戸末期、武士の双六は 甲冑装着マニュアル!!

甲冑のつけ方マニュアル

甲冑とは鎧と兜からなる武士の伝統的な武具のことです。なぜこの双六が発行されたのでしょうか？ それは、武士が甲冑の着け方を忘れてしまったからです。この双六が世に出た安政5年は日米修好通商条約が締結され、函館・神奈川・長崎・新潟・兵庫が開港される一方、安政の大獄の中、攘夷の風が吹き荒れていました。戦の危機が迫りつつも、甲冑は家の奥で埃をかぶっていたわけですから、絵解きのマニュアル双六の登場です。

陣から鉄砲・槍まで43マスで丁寧に説明

武士が陣を付け、小袴を履き、胴丸を着け、両刀を帯び、鉄砲や槍を持ち、戦場で活躍するまでのストーリーの中で装着マニュアルが機能を発揮します。振出しは陣太鼓、陣鐘、法螺貝の鳴り物。重要な情報伝達ツールでした。脛当てのマスを見てみましょう。「むずびめはしっかりとしめようはゆるくするがはいコレサあんまりゆるすぎではいかぬいかぬ」。実践的な説明書きでナルホド!と納得です。上りは「勝戦帰陣」で、褒美を下

賜される栄誉あるシーンが描かれています。

戦国時代は槍が主力装備

武士が実際に甲冑を着けて戦っていた戦国時代の主要な武器は槍でした。武田軍団の武具装備率(図3)を見ると、58%が長柄(5m程度の長槍)だったことがわかります。

長柄の穂は15cm程度で、柄のしなりを生かして穂先を打ち付ける打撃武器でした。果たして、幕末の武士は長柄を使いこなせたのでしょうか？ 槍術実践双六も必要だったのかもしれません。

弓と鉄砲 実戦ではどちらが強い？

弓にも鉄砲(火縄銃)にも射程距離(図4)があります。殺傷有効、最大いずれの射程距離も鉄砲が弓を上回っています。しかも、銃弾が持つ運動エネルギーは人力で放たれる矢の二十倍です。

しかし、「鉄砲の勝ち!」というのは、ちと早いのです。三浦正幸広島大学名誉教授(城郭建築史・2015年の松江城の国宝昇格に貢献)によれば、「鉄砲の最大の欠点は一発撃つと次の発射まで三分かかること。それに対して、弓はつがえて放てばいいので五秒に一矢放てる。三分あれば三十矢くらい放てる。鉄砲が一人殺傷する間に、弓は三十人を殺傷できることになる。つまり弓は鉄砲の三十倍の破壊力がある」ということだそうです。

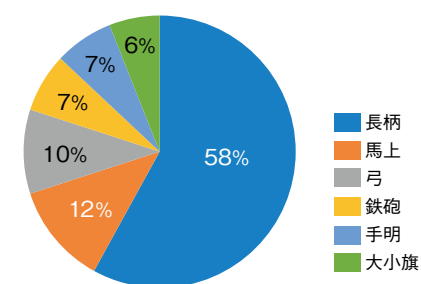
バックス・トクガワナの二百六十年は、弓も火縄銃も時代遅れの武器にしていまいました。近世に二百年以上も平和であったという国は、世界を見渡しても日本の他に存在しません。この双六はその証しなのです。

■ 図4 弓と鉄砲の射程距離比較

射程の種類/武器	弓	鉄砲 (火縄銃)
殺傷 射程	30	50
有効 射程	80	200
最大 射程	400	500

※猪爪ケイ氏の「戦国時代考察サイト〜戦国紫電将〜」のデータを筆者が表組みにした。

■ 図3 戦国時代武田軍団の武具装備率



出所:「図解武器と甲冑」(著者:樋口隆晴・渡辺信吾 発行:ワン・パブリッシング)

●吉田 修(よしだおさむ)プロフィール
1954年生まれ。島根県松江市出身。公益社団法人全国求人情報協会常務理事、和文教育学会会員の務めるかたわら築地双六館館長として双六の蒐集・研究・制作に取り組む。公式HP: <http://www.sugorokunet/>